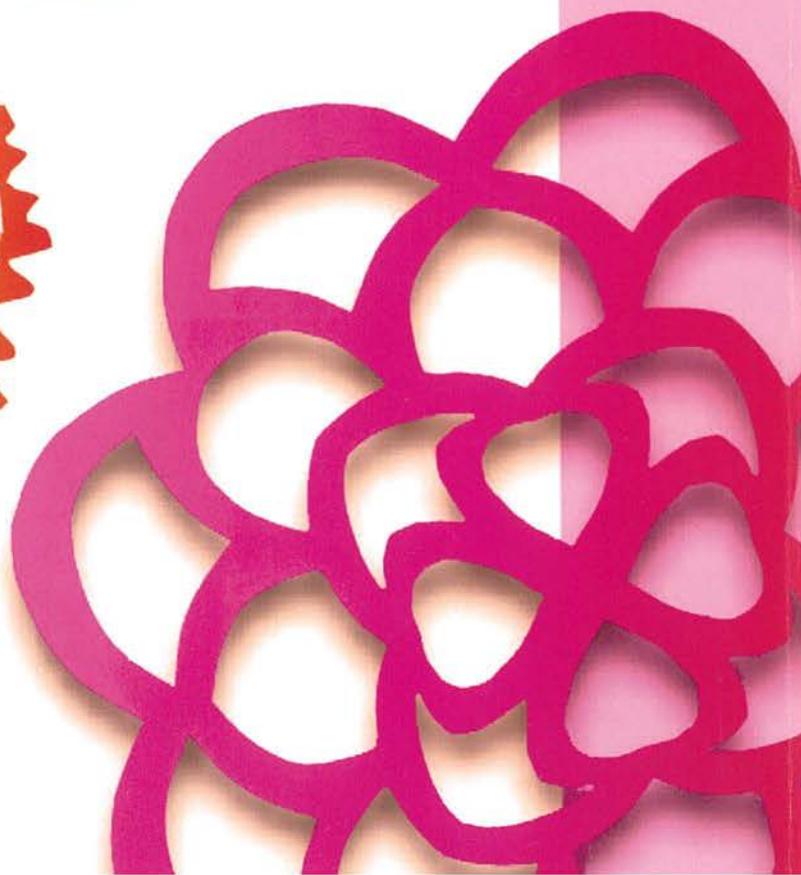
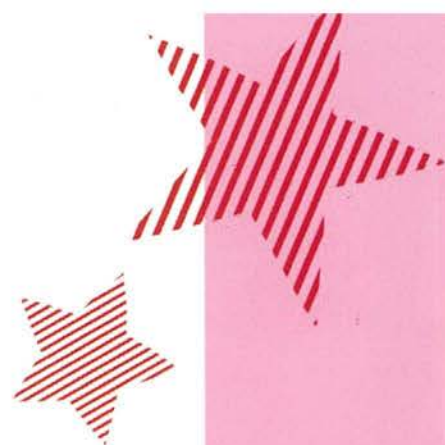


さいたま市 道徳読み物資料集

かがやき



1	うまくなつたよ、リコーダー……………1
4	となり合うきもち……………16
5	ゆうやくんとぼく……………20
6	平成しぐさ……………25
7	ヒーローはだれだ……………30
8	わが家の味……………35

もくじ

16	15	14	13	12	11	10	9
田島が原のさくら草	よみがえった三貫清水	ぼくのハウセンカ	かがやいて生きる	心に残った一枚の風景	グリーンベルトに花を	大宮薪能	打ち水の心
.....							
75	70	65	59	54	49	44	40

1 うまくなったよ、リコーダー

四月。ぼくは三年生になった。

「休み時間は何をして遊ぼう。サッカー好きな友達ができるといいな。」
新しい友達と遊びたい気持ちで頭はいっぱいだ。

五月。リコーダー教室があった。リコーダーの先生は、まほうつかいのように、次から次へと曲をふいた。ぼくも、まねして「トゥー トゥー トゥー」と、ふいてみた。

「お、なかなか 上手だね。」

ほめられて、ぼくは少しその気になった。

しばらくして、音楽のじゅぎょうでもリコーダーが始まった。ぼくは、リコーダーがだんだんふけるようになってきて、大はりきりで練習を続けた。



夏休み。ぼくは、おばあちゃんの家に行った。ついたその日におばあちゃんに「タやけこやけ」「なべなべ」を聞かせてあげた。「わあ、ひろ君、とっても上手だねえ。」

ぼくは、とてもいい気分だ。

つぎの日は、朝早くから、いとこと虫とりに出かけた。そのつぎの日は、川で魚つり。夜は花火。楽しい時間があつという間に過ぎていく。ぼくは、リコーダーの練習するのがだんだん面倒になってきた。

そんなある日。おばあちゃんが、さみしそうに言った。

「このところ、リコーダーの音が聞こえないね。ひろ君のふいたタやけこやけ、とっても気持ちかばかばかしたの。また聞きたいな。」
「うん。また、あとでね。」

ぼくは、目を合わせずにうつむいてこたえた。





次の日、ぼくはひさしぶりにリコーダーをとり出した。おばあちゃん、目をとじ、体をゆすりながら聞いてくれた。
「ああ、いい音色なこと。やっぱりひろ君はリコーダーが上手だね。」
おばあちゃんは、にっこり。ぼくも、おばあちゃんの顔をみて、にっこりした。

二学き。夏休みにがんばったことを、
クラスのみんなの前で発表することになった

た。ぼくは、リコーダーをぎゅつとにぎりしめ、「ようし。」
と、大きく息をすった。曲をふきおわると、みんながたたく
さんはく手をしてくれた。

「わあ、すごい。サッカーだけじゃなくて、リコーダーも上
手だね。夏休みの間にうまくなったね。」

ぼくはサッカーのゴールを決めたときのようにうれしくて、
思わずガッツポーズをした。



自分にはどんなダイヤモンドがあるのかな

好きなこと

とくいなこと

挑戦していること

興味のあること

まわりの人にもきいてみよう

4 となり合うきもち

(どうしよう。家に帰りたくないなあ。)

学校からの帰り道。あかねは、できるだけ
ゆっくりと歩きました。ランドセルがとても重く感じます。

(家に帰ったら、学校であったこと、話さなくちゃ……。お母さん、がっかりするだろうなあ。)

せみの声も、じりじりとてりつける太陽も、自分をせめているように感じて、あかねは、深いため息をつきました。

そのとき、すぐ後ろから、

「あかねちゃん。」

と、声がしました。ふりかえると、白い日がさをさしたとなりの家のおば





さんでした。

「どうしたの。元気ないみたいね。」

あかねは、その言葉にちよっとどきっとしました。おばさんは、そんなあかねの様子を見てにつこり笑うと、あかねをいっしょに日がさに入れてくれました。ならんで歩きながら、おばさんは言いました。

「うちの子もね、小学生のころ、あかねちゃんみたいに、ゆっくり歩いて帰ってきたことがあったなあ。いつもは早く遊びに行きたくて、いそいで帰ってくるのにね。友だちとけんかした日だけ、ゆっくりゆっくり歩いてたっけ。」

なつかしいな、と言いながら、あかねを見てやさしくほほえみました。その言葉をきいて、あかねはなみだが出そうになりました。

（おばちゃん、どうしてわたしの気持ち、わかったんだろう。）



「だいじょうぶ。明日はきっと、えがおで帰れるわよ。」

と、おばさんは、そういうながら家に入っていきました。

おばさんとわかれて一人になったときには、あかねは、とても晴れ晴れした気持ちになっていました。

（明日、学校に行ったら、わたしからあやまろう。）
「ただいま。」

あかねは、元気よくドアを開け、家に入っていきました。

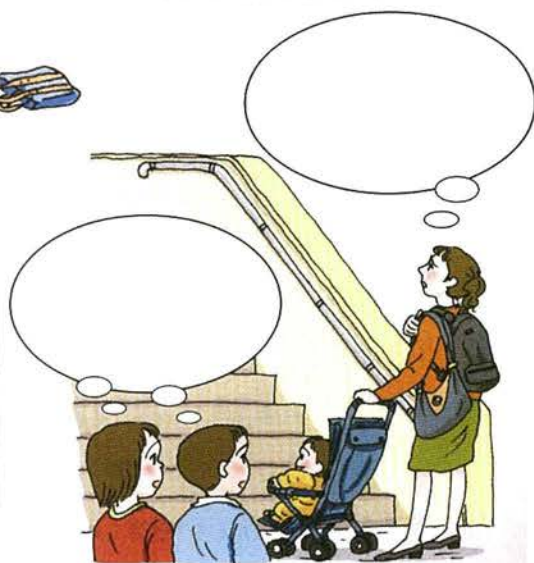


人の心を感じる力



この人たちの
気持ちわかりますか。

の中にあなたが感じた、
人の気持ちを書き入れましょう。



5 ゆうやくんとぼく

少しずつ紅葉が色付き始めるころ、二学期最後の行事、学習発表会の練習が始まりました。各クラスがなかよし学級（特別支援学級）と合同で、げきを発表するのです。

ぼくは、なかよし学級のゆうやくんとペアになり、げきの練習に取り組むことになりました。ゆうやくんは、ぼくと同じ四年生ですが、ほとんど話すことができません。ゆうやくんの動きは、ぼくが一緒になって、つききりで教えるのです。

いよいよ、体育館での練習です。自分たちの出番以外は、いすにすわっているのです、すこしいくつなときもありますが、全体の通し練習なので、しかたがありません。

ゆうやくんとならんですわっていると、ゆうやくんが、急に、そわそわとし

始めました。

「だめだよ。もう少しだから、ちゃんとすわって。」

ぼくが小さい声で注意すると、ゆうやくんは、ぼくの手をいきなりばしっとたたきました。

「いたっ。」

びっくりして、ゆうやくんを見ると、なみだを浮かべています。

（泣きたいのは、ぼくのほうなのに。注意されただけで、たたくなんて、あんまりだ。）

ぼくは、心の中で、そう思いました。

練習のあと、今日の出来事を、先生に相談しに行きました。担任の島田先生は、

「それは、いたかったね。ゆうやくんは、言葉では話さないけど、思っているこ



とがあるはずだよ。どんなことを思っていただろうね。」

と言いました。

（ゆうやくんは、どんなことを思っていたんだろう。）

ぼくは、考えながら家へ帰りました。

次の日の練習でも、ゆうやくんとならんですわりました。

昨日とおなじ時間になると、またゆうやくんがそわそわし始めました。

「ゆうやくん、つかれちゃった？あきちゃったの？」

ぼくは、聞いてみました。でも、ゆうやくんは、ぼくをちらっと見て、ちがうよ、というように、ずっとそわそわしつづけました。その次の日も……。

（なにが言いたいんだろう。）

と考えながら、ゆうやくんを見てみると、ゆうやくんは時計を見ながらしかめつづらをしています。



十二時。

そういえば、もうすぐ給食です。ぼくは

「おなか、すいたね。」

となにげなくつぶやきました。すると、ゆうやくんはぼくの手をにぎって、ひまわりがぱっと咲いたみたいのに、にこっと笑ったのです。

（ああ、なんだ。おなかですいていたんだ。ぼくと同じことを思っていたんだね。）

ぼくは、とてもすっきりしました。ゆうやくんの温かい手をにぎり返し、ほわっとした気持ちにもなりました。

それからぼくたちは、なんとなく手をつないだまま、げきの練習の続きを見ました。もう、ゆうやくんはそわそわしなかったし、ぼくは、今日の昼休み、ゆうやくんと遊びたいな、なんて考えていました。



○相手の気持ちを考えたけいけんや、自分の気持ちが伝わったけいけんなどを、思い出して書きましょう。また、そのときの自分の気持ちも書きましょう。



おうちの人、先生から

6 平成しぐさ



家族で動物園に行った、帰りの電車の中のできごことです。

ぼくたちは、動物園でさんざん歩き回ったあとだったので、座席に座ると、うとうとと、いねむりをしてしまいました。ふと顔を上げると、入口近くに立っていたおばあさんがにこにこしながら、こちらを見えています。

「どうぞ。」

ぼくは席を立ちました。でも、おばあさんは、わらったまま首をふり、すわってくれません。

（せっかくゆずったのにな……。）

ぼくはしかたなく、また、こしを下ろしました。



すわりはしたものの、おばあさんのことが気になって、
となりでねていたお母さんをつきました。

目を覚ましたお母さんも、おばあさんを見て、はっと
したように、

「気が付きませんで、申し訳ありません。」

と、席を立ちました。するとおばあさんは、

「いえいえ、あなた方はとてもつかれていらっしゃる。わたしはもうすぐおりますから、大丈夫ですよ。どうぞ、そのままおかけなさい。」

と、やさしくいいました。

「そんなことおっしゃらずに、どうぞ、どうぞ・・・。」

おたがいゆずりあって、どちらもなかなかすわりません。



座席はぽっかりとあいたままです。

「どうしたら、おばあさんに気持ちよく座っていただけんだろう。」

ぼくは、お母さんとおばあさんのおしもんどうを見ながら、じっと考えました。

そして、ぼくはいいことを思いつきました。

「じゃあ、みんなですわったらどうかなあ。つめればみんなですわれるかもしれないよ。」

ぼくはお父さんにぎゅっと体をよせました。お母さんもぼくのほうに少しつめました。そのとなりの席のおじさんもまたとなりのお姉さんも。

次々に、こしをうかせて、少しずつつめると、ちょうどお



ばあさんがすわれる分だけ席があきました。

「あらあら、みなさん、ありがとうございます。それではすわらせてもらいましょうかねえ。」

おばあさんは、やっとすわってくれました。そして、

「江戸時代にも、こんなすてきな思いやりのマナーがあったそうよ。ぼうやの発明は、平成しぐさでも名付けましょうかね。」

と、ぼくを見てうれしそうに言いました。ぼくは、みんなですわった少しきつい電車の席が、ほこほことあたたかく、気持ちよく感じました。

♥ わたしたちの道徳P 56～58

○身の回りにある「平成しぐさ」を見つけよう。

しぐさの名前

○どんな時に、どのようにしたのか。



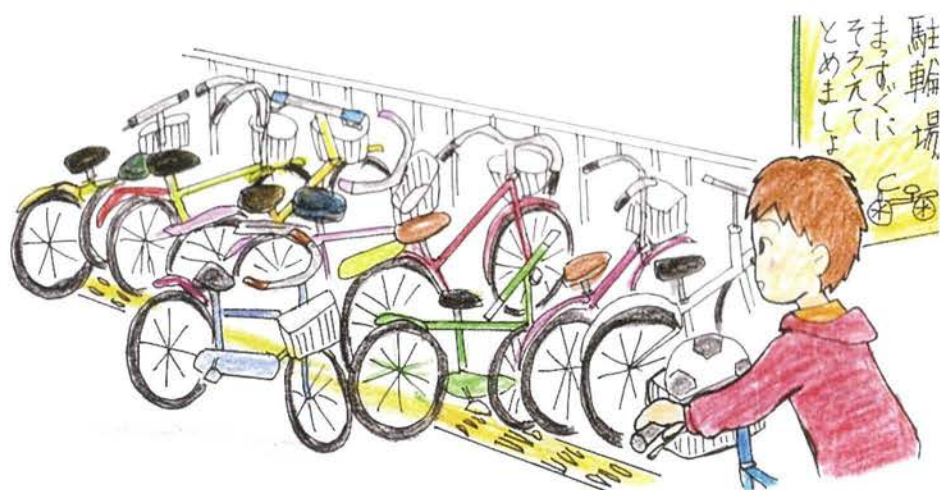
「江戸しぐさ」は、江戸時代、人と人とうちよく生活をするために、少しの工夫をしていたしぐさのことです。

たとえば、これは、「傘かしげ」。傘を差しながら道をすれ違う時、相手と反対側に傘を傾けます。そうすると、お互いが傘にぶつかったり、止まったりすることなく、仲よく通れますね。

他にもたくさんの「江戸しぐさ」がありました。

今の時代でも、自分も相手も気持ちがよくなるしぐさが見つかるでしょうか。





7 ヒーローはだれだ

(もう、みんな着いているかな。)

今日は、いつもの仲間と、公園で遊ぶ日です。ぼくは、早くサッカーがしたくて、少しでも自転車のスピードを上げました。

みどり公園は、いつもたくさんの方が利用しています。ぼくがとう着したとき、今日も公園のちゅうりん場は、いっぱいでした。自転車は、いろいろな向きにとめられていて、はっきりいつてぐちゃぐちゃです。ななめにとめられているもの、点字ブロックの上には、はみだしているものもありました。



「ちえ、まっすぐにとめてくれればいいのに。とめに
くいなあ。」

ぼくは、ちゅうりん場をうろうろして、ほんの少
しのすき間をみつけ、そこへ、自分の自転車をおり
やりおしこみました。(後ろが半分はみだしちゃっ
たけど、しかたがないや。)と思っているところへ、な
おきが自転車に乗ってやってきました。

「わあ、今日は、とくに自転車がいっぱいだね。」

「そうなんだよ。なんとかぼくはとめられたけど。な
おきも自転車をとめたら、早く来いよ。先に、行
ってるね。」

なおきに声をかけ、ぼくはボールをかかえて、グラ
ンドへ走っていきました。

ところが、なおきはなかなかやって来ません。

「なおき、おそいね。」

「何かあったのかな。見に行こうよ。」

みんなでちゅうりん場に行ってみると、なおきは、ピンク色の自転車をまっすぐにならべ直していました。それが終わると、次はとなりの自転車も。

「なおき、何をしているの。ほかの人の自転車なんて、ほうっておきなよ。」

ぼくが言うと、なおきはきっぱりと言いました。

「でも、このままだと、後から来た人が、とめられないよ。さいしょから、一人ひとりがまっすぐにならべれば、もっとたくさん自転車がとめられるはずなんだ。通路がふさがるほど、はみだしているから、通る人も、困るしさ。」



ぼくは、とてもおどろきました。そんなこと、言われるまで、まったく気付かなかったからです。自転車を並べるなおきを見て、ぼくは、急に自分はずかしくなりました。そして、なおきがちよっぴり大人に見えました。

ぼくは、少し考えてから顔を上げ、

「ぼくも、てつだうよ。ぼくたちみんなの公園だもんね。」
と言いました。なおきは、にっこりしてうなずきました。

それから、ぼくたちは、全員で力を合わせ、ちゅうりん場の自転車をきれいにならべなおしました。

自転車がまっすぐならんだちゅうりん場を見て、ぼくたちはすごく気持ちがよくまりました。通りがかる人たちもにこにこしています。

みんなでやったサッカーも、いつもより楽しく感じました。



★「ぼく」は自転車を並べ直しながら、
どんなことを考えているのでしょうか。

8 わが家の味

お正月。今年も母の実家に帰省している。祖母は、ご近所にあいさつに行くと言
って、寒い中、出かけて行った。

「ううん。おばあちゃんの作った栗きんとん、
最高。」

私はこたつに入って、おばあちゃんがつくった
栗きんとんをつまむ。ほのかな甘さと、しつ
とりしたなめらかな食感が広がり、幸せだ。

そこへ、母がお茶とみかんを持ってやってきた。並んで座り、おせち料
理のお重をのぞき、



「きれいなね。見ているだけでもいいけれど、食べるともっとすてきよね。」
そんなことを言いながら、おいしそうに食べた。

そして、私のお皿に黒豆をのせてきた。

「麻衣子、まめに働きますように。」

「なに、それ。」

「黒豆が、おせち料理に入っているのは、そういう願いがこめられているからなのよ。」

「ふうん。あ、だじゃれだね。」

「だじゃれというより、洒落（しゃれ）ね。日本人で、昔から言葉遊びが好きよね。」

そうかもしれないな。国語の時間の短歌にも、そういうのがあった気がする。確か、一つの言葉に二つの意味がこめられていた。日本語っておもしろい。

「じゃあ、これは。」

「昆布巻きは、よろこぶ。」

「へえ。全部、意味があるの。」

「そうらしいわよ。海老は、腰が曲がるまで長生きできますように、とか。」

「初めて知った。だから、どこのおうちも、おせち料理って大体同じなんだね。」

ぱくり、と昆布巻きを食べた母が、何かに気付いた、という顔をした。

「あ、でも、絶対に違うことが一つある。」

「え、何。」

「味よ。」

「味……？」

「うん。おばあちゃんの味は、ひいおばあちゃんから受けついだ味だか

お節料理



ら、絶対に、よそのおうちでは食べられないわ。」

思いもなかった。おばあちゃんの味は、我が家の伝統の味だったのだ。

「じゃあ、お母さんも受けついたので、おばあちゃんのおせち料理。」

「え。えっと、そうね。だし巻き卵くらいなら……」

言葉に「ごす母。たいへんだ。このままで
は、おばあちゃんの味を、食べられなくな
ってしまう。」

「おばあちゃん。お節料理教えて。おばあ

ちゃんの味、習いたい。」

帰宅した祖母に、我が家の味を受け継ぎたいのだ、と話した。すると、祖母は、ちよっと目を丸くしてから、

「覚えるの、難しいわよ。覚悟してね。」

と嬉しそうに言って、笑った。

あれから毎年、わたしと母と祖母は、三人で仲よくおせち料理をつくっている。まだまだおばあちゃんの味には遠いけれど、いつかきつと、同じ味のおせち料理をつくれるようになりたい。

♥ わたしたちの道徳 P 164
165



9 打ち水の心



「今日は中国の先生が学校に来てくれるんだよ。」

朝ご飯を食べながら、ゆりかはおばあちゃんに言った。

「それは楽しみなだね。おばあちゃんも、中国のお話、聞いてみたいねえ。帰ってきたら教えてね。」

ゆりかは、今日のそう合の時間が楽しみになってきた。

中国から来た王先生は、中国の楽器「胡弓」こきゅうをひいて見せてくれたり、中国の人たちが食べているという、たくさん種類の種類のおかゆの写真を見せてくれたりした。ゆりかたちにとっては、何もかもが初めて知ることばかりだ。

王先生のお話が終わってしつ問タイムになった。

「王先生は、日本のどんなところが好きですか。」

「大好きな所がたくさんあります。日本の人たちはどこ



に行っても、本当にみんな温かくて、思いやりの心があります。わたしは、日本に来るとほっとします。」
と話してくれた。ゆりかは（そういえば、おばあちゃんはいつも、思いやりが大切よって言ってたな。）と、おばあちゃん
の口ぐせを思い出した。

次に、小林君がしつ問をした。

「日本に来てめずらしいと思ったものはありますか。」

王先生は、ちょっと考えてからにこっとわらって、

「夏に、打ち水大作戦というのを見ました。ゆかたを着た人たちがみんな同じおけを持って水をまいていました。打ち水という 昔の風習をふっ活させるキャンペーンだそうです。」

と答えてくれた。すると担任の福田先生が

「夏に、商店街などでよくやるようになりましたね。みなさんでお風呂などの残り水をまいてすずしくしよう、という取組らしいですよ。」

と説明してくれた。

家に帰ったゆりかは、きっそく今日のことをおばあちゃんに話した。

「おばあちゃん、打ち水って知ってる。」

「そういえば最近はあまり見なくなったねえ。打ち水というのは、お客様をおむかえするときのそうじの仕上げにやっていたものなんだよ。」

「ふうん。」

「ようこそいらっしやい、という気持ちをこめて、おそうじの仕上げに、げん関先に打ち水をしたものだよ。」

ゆりかは「王先生の言っていた打ち水大作戦とはずいぶんちがうな。」と思いながらおばあちゃんの話聞いていた。

「まねかれたお客様は、打ち水を見てから門に入るようにしていたんだよ。」
「どうして。」

「あまり早すぎて、まだじゅんびもできていないうちにほう問するのも失礼だし、あまりおそくて、打ち水がかわいてしまうほど待たせてしまうのも失礼

でしょう。」

そう言って、おばあちゃんは、おいしそうにお茶を飲んだ。

「早すぎても失礼になるなんて思わなかった。昔の人はよく考えていたんだね。」

「打ち水の心といってね、おたがいが相手を思いやることを大切にしてきたんだよ。」

と、につこりわらった。ゆりかは、この話を聞いてはっとした。

「そういえば、王先生が、『日本の人はみんな温かくて思いやりがあります。』って言ってたよ。打ち水の心の思いやりを感じてくれたのかな。」

「そうなの。王先生がそんなふうに言ってくださったの。形はかわっても、打ち水の心は受けつがれているのかもしれないね。」

おばあちゃんは、うれしそうにうなずいた。



10 大宮薪能 たきぎのう

今年も大宮薪能が行われるころとなった。

大宮薪能とは、氷川神社ひかわじんじやの境内けいだいで、毎年五月のおわりに行われる能ぶたいのことだ。ぼくはあまり気は進まなかったが、父に誘われるまま、いっしょに行くことにした。

「健太、ほら早く。」

父は、ぼくをせかしながら、氷川参道を歩いて行く。

「父さん、まだ四時だよ。始まるのは五時半だよ。ゆっくり行こうよ。」

ぼくがそう言っても、父は歩く速さをかえずにどんどん進んで行く。

（はり切っているなあ……）

ぼくはため息を一つつくと、父を追いかけた。ケヤキ並木の参道に続く平成広場では、ハトにえさをやっている家族づれや、木かげのベンチで楽しそうに話

をしている若者のすがたが見える。境内につくと、すでに大ぜいの人がいた。

「うわあ、すごい。」

ぼくは、あまりの人の多さに思わず声をあげた。

「健太、こっちだよ。」

父とぼくは人ごみをかきわけ、指定された席に並んですわった。となりにすわっていた着物すがたのおばあさんが、

「こんにちは。今日は晴れてよかったですね。」

どうれしそうに言った。父は、

「本当にそうですね。いやあ、それにしてもおどろきました。早く来たつもりでしたが、もうこんなにみなさん来ていらっしやるとは。」

「ええ。本当に。わたしも毎回楽しみにしているんです。見に来る人は、毎年多くなっていますね。今年で二十三回目なんですよ。」

「二十三回もやっているのですか。それは知りませんでした。毎年五月にやる

ことは知っていたのですが。ずいぶん前から続いているのですね。」

「なんでも今年一番早く来た人は外国の青年ですって。ほら、あちらにいる方。朝から来ていたそうですよ。」

ぼくは、二人の話をききながら（へえ、そんなにすごいものなんだ。それにしてもそんなに早くから……。よく開えんの五時半まで待ってられるなあ……。）と思った。

西の空が赤くそまり、開えんが近付いてきた。

火入れ式でぶたいに火がともされると、辺りのやみがこくなった。風が、ゆれる葉音とともに、ぼくのほおを通りすぎた。（いよいよ始まるんだな。）待ちくたびれていたぼくも、いきおいよくもえる火を見ているうちに、わくわくしてきました。

カーンと空にひびく太鼓の音。

ピョオーとするどい高い笛の音。

薪能の始まりを知らせる音色は、ぼくの心にまっすぐとどいた。

そして、その音につづいて、能面をかぶった人がゆっくり歩いて来る。

ぼくは、一步一步、足を上げずにすべるように歩くそのすがたを見つめていた。中央のぶたいに来るまでの時間が、とてもゆっくり流れているように感じた。そして、すそがゆかにつくような、ごうかないしょうを着た人達が中央のぶたいにたどりつくとはりのある声と笛や太鼓の音が、夜空いっぱいに鳴りひびいた。

ぼくは、別世界にいるかのような気持ちになっていた。ぼくは、自分の心ぞうがとてもしどきどきしているのを感じた。話す言葉は、昔の言葉使いでおずかしかったが、動きや話し方、声の大きさから、ひしひしと伝わってくるものが

あった。表じょうの変わらないはずの能面が、ぼくには生きている顔のように思えた。

ふと見ると、まわりの人々も、すいこまれるようにぶたいを見つめていた。その中に、あの外国の青年の顔を見つけた。青年の顔はぶたいを赤あかと照らす炎を受けてだろうか、よりいっそうかがやいていた。

すっかり暗くなった氷川参道を父と歩いて帰った。ぼくは、半分ゆめの中にいるようだった。父が、

「いいぶたいだったなあ。来年もまたみたいなあ。健太、いっしょに来ような。」
と言った。ぼくは

「本当、絶対だよ、父さん。母さんや姉ちゃんもさそって、みんなで来ようよ。」
大きな声で言った。大宮薪能をはじめてみたぼくは、おねをはりたい気持ちでいっぱいだった。



わたしたちの道徳

P 160

11 グリーンベルトに花を

「おはようございます。」「いってきます。」

色とりどりの花に囲まれながら、子どもたちが学校へ向かいます。

ここは、岩槻区本丸のグリーンベルトです。そこには、一年を通して草花が咲いています。春はさくら草、夏はラベンダー、秋はコスモス、冬はじんちようげ。誰の庭でもないグリーンベルトに、どうして花が咲いているのでしょうか。



今から四十年前、私たちは、岩槻の本丸に越してきました。その頃のグリーンベルトは、ただの土手でした。街灯もなく、夜は真っ暗。暗やみの中を走りぬける東武鉄道は、まるで銀河鉄道999のよう

スリーナイン

でした。土手には草や木がおどろきに生え、足場はデコボコ。みんな、やっこの思いで駅や学校に歩いていったものでした。

そんなある日、私たち夫婦に赤ちゃんが産まれました。しかし、赤ちゃんをうば車に乗せて散歩に行こうと思っても、草だらけの土手を歩かなければなりません。私は、（この子が岩槻小学校へ通うようになったら、歩いていくのが大変だろうなあ。）と、心配しました。

その後、土手は少しずつ整備され、土手がじゃり道となり、じゃり道はコンクリートになりました。私は、その歴史をずっと見守ってきました。ここを歩く人たちが気持ちよく歩ける道になるように願いがら。

平成になると、ついにコンクリートのグリーンベルトが完成しました。コンクリートは、平らで頑丈。うんと歩きやすくなりました。しかし、新しいグリーンベルトは何か物



足りません。

（もっと、みんなが気持ちよく歩けるグリーンベルトにしたいな。）
そこで私は、道ばたの雑草をぬき、「じんちようげ」を植えたのです。
「じんちようげ」は、早春に咲く、もも色の美しい花です。コンクリートと雑草の道に、初めて花が咲きました。自分の心が、パツと明るくなったような気がしました。

しかし、ある日。グリーンベルトに行くと、植えたばかりの「じんちようげ」がありません。（あれ、どうしたのだろう。）と不思議に思い、もう一度「じんちようげ」を植えてみました。またな
くなっていました。「おだまき」や「さくら草」も植えてみました。しかし、次々になくなっていききました。
きれいな花がほしくて、持って帰ってしまう人がた
くさんいたのです。



（花どろぼうはどろぼうにならないと人は言うけど……。せっかく植えた花なのに。家に持ち帰って、どんな気持ちで花を見るのだろう。）
悲しさと悔しきで、私はがっかりしました。

しかし、私は、花植えをやめませんでした。（みんなもいつかはわかってくれるはず。）

毎日バケツに水を入れ、朝と夕方に水やりをしました。雑草が生えと草むしりをし、土をよくしようと油かすやふよう土を入れてまぜたりもしました。

ほしい方はどうぞというメッセージをそえて、家で育てた花を花束にして置いておくこともありました。（私は私にできることを精一杯やっていこう。）そんな思いでいっぱいでした。

するとある日、そんな私の活動を見ていた地域の人たちが話し合い、この花だんの花は自治会で管理しています。花を取らないでください。

という看板をつけてくれました。草むしりやゴミ拾いを手伝ってくれる人もでてきました。

「坂を登っていった、お花が咲いているとほっとするわ。」
私は、そんな人たちの住む岩槻の町と人が、ますます好きになりました。

その後も活動は続けられ、グリーンベルトには草花が咲くようになりました。ポーチリカ、ラベンダー、あじさい、ゆり、菊、トレニア、コスモス、朝顔、パンジー。ただのコンクリートだったグリーンベルトはいつもきれいな草花で囲まれています。

須永さんはこう言います。

「私が元気なうちは、花を植え続けます。」

♥ わたしたちの道徳 P 160



12 心に残った一枚の風景

「わああ。」

大ホールのとびらを開けたとたん、ぼくは、思わず声を上げた。ピンクのさくら草と大きな川、そして遠くに山々がっらなっているどん帳の風景が、目の前に大きく広がっていたからだ。

ぼくたちは、学校の代表として音楽会に出場するため、さいたま市文化センターに来たのだ。もうすぐ始まる。ときどきしながら席についた。時間となり、どん帳が静かに上がった。

さいたま市のどの学校も、すばらしい演奏だ。いよいよ、ぼくたちの番。ときどきしながら舞台にあがった。ピアノの伴奏を聞きながら、先生の指き棒に注目し

て、気持ちをこめて歌った。歌い終わって客席を見ると、ほかの学校の人たちが拍手をしてくれた。あのどん帳が下がっていたステージで、カいっばい歌えたうれしさがこみ上げてきた。

家に帰り、お母さんに、満足のいく発表ができたことと、大ホールのどん帳の絵に感動したことを話した。お母さんは、にこにこしながらぼくの話聞いていた。

「発表が上手にできてよかったわね。それに、勇太がどん帳に感動したことも、お母さんうれしいわ。」

と言った。ぼくはふしぎに思い、

「どうして。」

と聞いてみた。お母さんは、夕食のしたくの手を休め、

「お母さんも小学生のころ、埼玉会館のどん帳の絵が大好きだったのよ。今でもはつきりおぼえているわ、何ともいえない色合いの大きな山を。大人になって、それが

埼玉県を代表する秩父の武甲山という山で、浦和区に住む画家の高田誠さんの作品であることを知ったの。たしか文化センターのどん帳も高田誠さんよ。」と話してくれた。

「そうそう、ちょうど、うらわ美術館で高田誠展をやっているから、買い物の帰りにでもよってみない。」

と、お母さんが言った。ぼくは、

「行く、行く。」

と、すぐに返事をした。

数日後、ぼくは、お母さんといっしょに高田誠展に出かけた。美術館に来るのは、初めてだ。美術館には、たくさんの人が見に来ていた。高田さんの作品は、風景や静物をえがいた絵が多く、点びよう技法といわれる点によってえがかれてい

た。細かい色の点が重なりあい、ひびきあい、何ともいえないあたたかさを感じた。高田誠さんの風景画「黒姫山」の前に立つとその風景の中にいるような感じがした。

「この絵を見ると、心がおだやかになるわね。」
と、お母さんも絵に見とれていた。

会場には、高田誠さんの年表もあった。お母さんに説明してもらいながら読んでみると、さいたま市役所のロビーのへき画や、さいたま市民会館うらわのどん帳なども高田誠さんの作品であることがわかった。埼玉県の美術の発展にも力を注いだこと、個人では初めて埼玉県民栄誉賞をうけ、平成四年に浦和名誉市民として市民葬が行われたこともわかった。

「高田誠さんが、日本でも有名な画家ということは知っていたけど、こんなにいろいろな仕事をしていたのね。」

と、おどろいたようにお母さんは、言った。

ぼくは、やさしくおだやかな作品が多くの人々に親しまれただけでなく、高田誠さん自身も浦和の人々に愛されていたことが分かって、とてもうれしくなった。やさしそうな高田誠さんの写真も印象に残った美術展だった。

ぼくは、高田誠さんというすてきな人が、ぼくと同じ浦和に生まれ、多くの作品を作り、今も多くの人々に愛されていることを自まんしたくなった。さいたま市文化センターのどん帳の田島ヶ原の風景とみんなで心を合わせて歌ったことは、ぼくの一歩の思い出になった。

♥ わたしたちの道徳

P
159

13

かがやいて生きる

車の中で、わたしもお母さんも、弟も、だまってまどの外をみていました。いつも明るいお父さんも、一言もしゃべらず、前を見つめて運転しています。

わたしの大好きなおばあちゃんが、今朝けさ、なくなったのです。

おばあちゃんの家に着くと、いとこの家族や、親せきのおじさん、おばさんたちが集まっていました。

台所をのぞくと、おばあちゃんの家の近所の人たちが、お米を炊いたり、白い紙を貼ったりして、忙しく働いています。



「あなた、まなちゃん？」

ひとりのおばさんに、声をかけられました。初めて会う人です。（どうしてわたしのことを知っているのだろう）と思いながら、「はい。」と答えると、次々に近所の人たちが話しかけてきました。

「工作や折り紙がとっても得意なんだってね。」

「この前の運動会では、大きな声でお友達を応援してがんばっていたんだよね。」

「宿題の漢字の練習を毎日ていねいに書いているんだってね。」

まるで、わたしのことを全部知っているみた

いです。

お父さんと目が合うと、

「おばあちゃんね、まなが生き生きして
いること、何かにうちこんでがんばって
いることが、うれしかったんだよ。」

と、言いました。お母さんも、おじいちゃんも、にっこりしながら、わたしを見ています。

そのとき、おばあちゃんが、わたしの頭をなでながら、いつものように、

「まなちゃん。」

と呼んだ声が聞こえた気がしました。

おばあちゃんといっしょに散歩をしたことや、いっしょに歌を歌





ったこと、畑の豆をたくさん取ったことが
思い出されました。

「まなが、豆をおく手は、おばあちゃんに
そっくりね。」

いつか、お母さんに言われたことを思い出
しました。

急に涙がたくさんあふれてきました。

（おばあちゃんには、もう会えないけれ
ど、おばあちゃんに大事にしてもらったわ
たしは、ここにいてるんだな。）

まなは、自分の手を見つめ、そっとにぎ
りしめました。

道徳の時間 アンケート

年 組 ()

- ① 「命」と聞いて、思いうかぶことはなんですか。

[]



- ② 自分が「生きているなあ。」と、感じたことは、ありますか。

ある ない

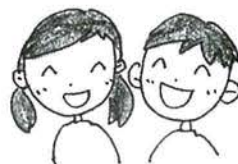


- ③ 「ある」と答えた人に聞きます。それは、どんなときですか。

[]



○「かがやいて 生きる」……自分の思いや考えを書きましょう。



14

ぼくのハウセンカ

理科の時間、植木ばちにハウセンカの種をまきました。とても小さな種です。よくたがやしてふかふかにした土に、そっとまきました。そして風にとばされないように、そっと土をかけました。

種をまき終わると、先生がおっしゃいました。

「ハウセンカは、お話できないし、自分で歩くこともできません。水がほしいと言えないし、飲みに行くこともできないんだね。みんなが、ハウセンカの言いたいことを感じてあげるのですよ。」

ぼくたちは、元気よく「はい。」と返事をしました。



ハウセンカは、小さな芽を出しました。ぼくは、小さな芽がおぼれてしまわないように気をつけて、少しだけ水をやりました。かんかんでりの毎日が続きます。ハウセンカは水をたっぷり飲んでぐんぐん大きくなっていききました。

ある朝、係の仕事で頭がいっぱいだったぼくは、ハウセンカの水やりを、すっかり忘れてしまいました。二十分休みになりました。

(ハウセンカに水やりしなくちゃ……。)

分かってはいましたが、二十分休みはとなりのクラスとドッジボールの決着をつける約束をしています。

「後でやろう。」

二十分休み、ぼくは、汗びっしょりになって、楽し





く遊びました。

「ああ、のどがかわいた。」

水をごくごく飲んですっきりすると、ふと、先生が種まきのときにおっしゃった言葉を思い出しました。

ぼくは、急にハウセンカのことを気になってきました。でも、もう、授業が始まります。

（どうしよう、ハウセンカがかれちゃう・・・。）

時計の針は、なかなか進みません。きのうの朝から水をやっていないハウセンカの声が聞こえてくるようでした。

やっと休み時間になりました。ぼくは教室を飛び出しました。ハウセンカは、ぐったりとしおれていました。今日はとくに暑い一日でした。

「ごめんね。今、水をあげるからね。」

ぼくはあわてて、水をやりました。たっぷり、水をやりました。

放課後、ぼくは、ときどきしながらハウセンカを見にいきました。すると、ハウセンカは元気に、しゃんとした姿でたっていました。

「よかったあ！」

ぼくはほっとしました。

ハウセンカは、たくさんの花をつけました。そして、毛でたっぷりとおおわれた、実をつけました。

ぼくのハウセンカのまわりには、小さな芽がたくさん出ていました。ハウセンカの実は、ぷちんとはじけて、種を遠くにとばすのです。植木ばちからとびだして、かたい地面から芽を出しているもの



もありました。

「わあ、すごい。」

ぼくは新しい小さな芽をそっと植木ばちにうつしました。

★ぼくの心に聞こえてきたハウセンカの声をかきましよう。



15 よみがえった三貫清水^{さん がん し みず}

今日はチャレンジタイムで、三貫清水に行く。グループごとに、出発だ。
「どんな生き物がいるのかな。」

「オタマジャクシが見つかるといいね。」

期待でみんなの足も速まる。やっと鎌倉街道の道しるべが見えてきた。
「もうすぐだ。」

清水のせせらぎの音を聞きながら坂道を下った。北池のわきを通り過ぎ、
南池に向かった。どこからか小鳥の声も聞こえてくる。

「ウグイスじゃない。おばあちゃんの家の近くで聞いたのと同じ声みたい。」
と、黒沢さんが言った。

南池の前の広場で一休みしたら、いよいよたんけんだ。僕たちのグループ

はまず池の中の生き物をさがすことにした。池の前には、小さな女の子とそのお母さんらしい人がいた。(何かいるのかな。)近くに行ってみると、女の子が小さな手のひらに黒くて細長い貝をのせて見ていた。

「おはようございます。その貝はなんですか。」

と、ぼくたちは聞いてみた。

「これは、カワニナといってホタルの幼虫のえきになるのよ。わざわざ遠くからとってきてこの池に入れているんですって。」

「ホタルの幼虫って。」

ぼくたちは思わず聞き返した。ホタルの幼虫なんてだれも見たことがなかった。すると女の子のお母さんは、そっとカワニナを池の中に返すと、近くにあった石を指して、

「きつと、この石の下あたりにいるかもしれないね。でもそっとしておいてあげようね。もうすぐ上陸してきれいなホタルが見られるようになるから。」

と言って、にっこりした。

「ええっ。ホテルが上陸。」

ぼくたちは何のことかわからずまた大きな声で聞き返した。

「そう。雨のふっている夜、ぴかぴか光りながら行列を作って池から上がってくるの。とってもきれいよ。そしてまた土の中にもぐってさなぎになるの。」

ぼくは、飛んでいるホテルが光ることしか知らなかったので本当にびっくりした。そして真っ暗な夜の、雨の中の静かな光の行列を想像してみた。

「池の周りを見てごらん。やわらかそうな土が見えているところがあるでしょう。そこがホテルの上陸するところ。みんながふんだりすると、かたくなってしまっ、ホテルが上陸できなくなるから気を付けてあげてね。」
と教えてくれた。ぼくたちは、大きくうなずいた。

「おばさん、ホテルはかせみたい。なんでも知っているんですね。」

「ううん。もっとくわしいホテルはかせがいるのよ。おばさんはそのはかせのお

手伝いをして、教えてもらったの。」

「すごい。おばさんよりもくわしいんですか。」

「そう。おばさんがこの子くらいのころは、たくさんのおタルがとんでいたし、川でおよぐこともできたの。でもその後、川の水はどんどんきたなくなつて、この辺はごみ置き場みたいになつていたの。水もかれてしまつて、おタルなんてもうぜつたいに見られないと思つていたのよ。」

おばさんは、女の子の頭をなでながら話してくれた。

「そんな時におタルはかせのおじさんが、三貫清水を昔のようなおタルの里にしようと、研究をはじめたの。」

「どんな研究ですか。」

ぼくたちは、身を乗り出した。

「何がおタルに一番大事なのかを研究したの。そしてわかつたことは、きれいなお水。」

「そうかつ。だから三貫清水のまわりをみんなでごみひろいしているんだ。」
「そう。ごみひろいも、もう十年以上も続いているのよ。」

「十年以上っていったらぼくたちが生まれる前からだよ。すごいなあ。」
ぼくは言った。

「それで、こんなにきれいなお水になったんだ。」

黒沢さんが言うのとみんながうなずいた。ぼくは、この美しい三貫清水がごみだらけになっていた時期があったなんて、まったくしらなかった。

ぼくたちはおばさんにお礼を言って観察を始めた。池の中にはびっくりするくらい大きなオタマジャクシがいた。ぼくたちは、ホタルの幼虫が上陸する土手をふまないように用心しながら、オタマジャクシをつかまえた。ぼくは「カワニナが住めるきれいな水をずっと守っていききたいな。」と思った。

「六月の終わりごろには、ホタルが飛び始めるから見においで。」
おばさんが言った。ぼくは（絶対見に来るぞ。）と思った。

16 田島が原のさくら草

進級して間もなく、幸一たちの第八町会では、日曜日にハイキングに行くことになりました。目的地は秋ヶ瀬公園です。

当日、町会長の吉野さんを先頭に、小学生三十人とお父さん、お母さんの一団が町なかを通り抜け荒川の土手ぞいに歩いて行きました。ときどきほほに当たる風は、ひとところより柔らかな感じがします。

一時間三十分ほどで公園に着きました。そこは野球場ありサッカー場あり、とても広く木々もたくさん茂っていて、緑の公園といったところです。

しばらく遊んだあと、吉野さんが

「これから、たからものを見に行くぞ。」

と、大きな声で言いました。

「たからものってなんですか。」

「早く見せて、見せて。」

みんなは、口ぐちにせがみました。

公園から五分くらい歩いて、荒川の土手に出ました。みんなひといきに土手をかけのぼりました。そして「アッ」と声を上げました。かわらを見下ろすと、そこはまるで緑のじゅうたんをしいたような野原が広がっています。その一角に、あざやかなうすべに色の小さな花が、一面に咲いていたのです。

「わあ、きれい。」

「かわいい花だね。」

そのみんなの足元には、白い立札がありました。そこには

「天然記念物、さくら草、田島が原」

とすみで黒々とかかれています。町会長の吉野さんが、子どもたちの驚いた顔を見てにこにこわっています。

その時です。白いボールがだれかの手を離れ、ころころと転がりおち、花が
いっぱい咲いている草むらに入り込んでしまいました。みんなはボールの行方
をだまって目で追いました。

「ぼく、とってくるよ。」

幸一は土手を勢いよくかけおりて、さくら草のお花畑に入っていきました。
（確かこの辺だったかな……。）草むらにかくれてしまったボールを夢中になっ
て探しているうちに、さくら草を何本かふみつけてしまいました。

それを見ていた良子が

「幸一くん、さくら草をふみつけているわよ。気を付けて。」

と大きな声で言いました。幸一は

「こんなに咲いているんだもの、少しくらい踏みつけてもだいじょうぶだよ。」

と、ほったたをふくらませて、怒ったように言い返しました。良子は幸一の勢
いに驚き、そのまま黙って横を向いてしまいました。やがてボールは見つかり、

幸一は得意そうに、おりたときよりスピードを上げて戻ってきました。

幸一と良子のやり取りをじっと見ていた吉野さんが

「おうい、みんな、ここに集まれ。」

と声をかけました。吉野さんのまわりにみんなが集まり、腰を下ろしました。吉野さんは、集まった子どもたちをゆっくりと見回してから、この田島が原にたくさんのさくら草が咲いているわけを話し始めました。

ひとおかし前は、もっと広くおれをなして咲いていたんだよ。ところが大水が出るたびにさくら草がおし流され、また、ぎやくに雨が降らなくて何日も強い太陽にさらされて、水温が上がって根がくさってしまうこともあったんだ。また大水は赤土や砂を運んできて、水はけを悪くして、さくら草をだめにしてしまうのだよ。

ところがいつごろからか、大雨がふったり、大水が出た翌朝には、きまって

この田島が原に岡田さんの姿を見かけたものだよ。岡田さんは、水はけをよくするためのみぞをほったり、赤土や砂がたまったところを手ですくってやり、またひりょうをまいたりもした。かれそうな花は根ごと掘り起こし、大切に持ってかえって鉢植えにし、一年間育てて元気に芽が出たところで、また田島が原に植え替えたりもしていたんだ。

しかし、一人の力だけでは限りがあるさ。そこで岡田さんは県庁の公園緑地課に相談したり、このままだとさくら草が絶えてしまうと新聞で広く市民にうったえたりして、協力をあおいだんだ。

すると、その話が人から人へと伝わって、ボーイスカウトが協力を申し出たり、県庁では専門の作業員を出したりして、花の移し替えをはじめたんだ。浦和の山草会やさくら草同好会の人々もかけつけて協力をおしよめたかった。新聞を見た人々も移植ごてをもって集まって、田島が原に移し替えたかもしれないだよ。岡田さんの、さくら草を保護し育てようという思いが、

人々の心を動かしたんだね。

岡田さんはよく言っていたよ。

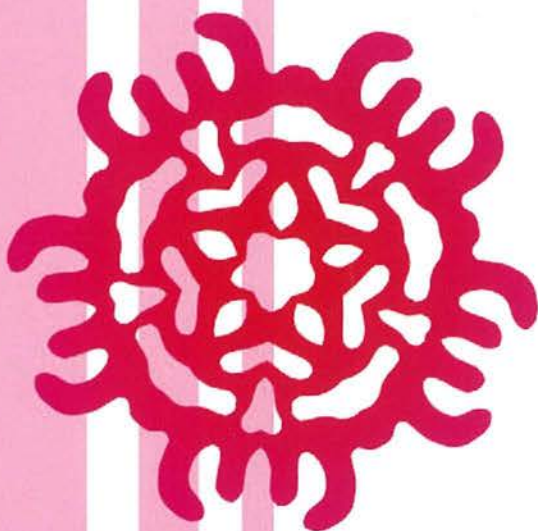
「花の心を人の心にうつしとりたい。心のすなおな人は花が好き。花の心を理解し、花と言葉をかわしたい。」
ってね。

こうして、吉野さんは、一人うなずくと、話を終えました。

幸一は胸があつくなり、もう一度さくら草を見つめました。さくら草がまぶしくかがやいてみえました。

帰り道には、いろいろな草花が目につきました。幸一は、「どの花もいっしょうけんめいさいているんだなあ。」と、思いました。

本資料集は、さいたま市道徳郷土資料集（第1集～第2集）
心豊かなさいたま市の子どもをはぐくむために（第1集～第3集）心のノート（さいたま市版）
と併せて、編集した。



小学校

学	3年	組
校	4年	組
名		
前		

発行 さいたま市教育委員会

〒330-9588 さいたま市浦和区常盤6丁目4番4号

平成28年8月

この冊子は12,250部作成し、1部当たりの印刷経費は92.6円です。
(この印刷物は国から全額補助を受けて作成しています)

